

眠京志郎

川崎ゆきお

眠るのが好きな男だった。人生最大の楽しみは眠ることだという。

一日の目的もそれで、メインは眠ることだった。

しかし一日中眠ってられない。いくら好きなことでも目が覚めると、もう眠ることはできない

。

眠ることが好きななので、ひと以上に睡眠時間は長い。だから一度起きると夜までしっかり起きています。

目覚めはよい。寝入る時も好きだが、目覚める時も好きなのだ。

しかし、一度起きてしまうと、寝るまでの時間が退屈だ。

京志郎はその間、なんでもいから時間を持たせればよいと考えていた。目的が昼間にあるのではなく、夜にあった。

しかし夜の世界を楽しむにしては、単に眠るだけのことなので、これは誰にでもできることだ

。

学校を出てからずっと同じ会社で勤めている。無遅刻で、ずる休みもない。

どんな仕事でもよかった。人生の目標とかは仕事の上にはなかった。気分よく眠れば、それでよいのだ。

さすがにそのことはずっと黙っていた。眠るのが目的とは、かなり妙な話で、誰でも手に入れられる目標だ。

京志郎は見た目は普通の男だが、わずかな人間にしか見せたことのないコレクションがある。それはパジャマで、洋服ダンスにずらりと吊るされている。

会社から戻るとパジャマに着替える。早く眠りたいためだが、寝るにはまだ時間がある。

徐々に眠くなるように、難しい本を読んだり、難解な映画を観る。よく分からなくてもいいのだ、眠気が催せば成功なのだ。

テレビや本はベッドで楽しむ。徐々に眠気がきたとき、流れが途切れないうちに、寝入ってしまうように、立ち上がらなくてもよい工夫がなされている。

眠っているときは、意識は落ちるが、夢を見る。それも楽しみの一つで、眠るのが好きなのも、夢を鑑賞できるからだ。

昼間あったことが、何かに置き換えられて上映される。

起きたとき、あれは昼間見たあれだな...とか、思い出すのも楽しみになっている。

京志郎は健康を維持している。そうでないと寝付きや目覚めも悪いからだ。

人には公言できない隠しネタがあるものだ。

了